

中国語副詞の分類について (1)

鈴木 義 昭

1. はじめに

中国語副詞の分類は、他の言語においても同様かと思われるが、副詞という品詞自体の持つ多様性ゆえに、諸家の説も実に多岐に亘っている。本稿では、まず副詞が品詞分類の中で、どのように位置付けられてきたかを、「実詞」、「虚詞」という分類法を一つの基準として、眺めてみることにしたい。その後で、副詞の下位分類がどのようにして行われているかを、主に日本語と対照しながら、眺めてみたいと考える(次号)。

2. 副詞の位置づけ

中国語においては、よく「実詞」・「虚詞」という分類がなされる。古くは、『爾雅』において、前三篇を「虚詞」に割いた¹⁾のを始めとして、劉勰『文心雕龍』においても、「虚詞」を、「発端」・「礼句」・「送末」の三篇に配する²⁾。劉淇はその書、『助字辨略』序において、

構文之道、不過實字虚字兩端、實字其體、而虚字其性情也。(構文の道は、実字・虚字の両端に過ぎず、実字は其の体にして、虚字は其の性情なり。)

と述べた。書名に「助字」の二字を冠している以上、「助字」とは、所謂「助詞」だけの意味ではなくして、「重言」・「助語」・「断字」・「疑字」・「詠歎字」等を含めた「虚字」、「虚詞」の謂いである³⁾。

清末、馬建忠『馬氏文通』は、西洋文典を模倣して著されたものと言われるが、やはり「実字」・「虚字」という伝統的な分類法を踏襲している。

表 1 馬建忠の品詞分類

名字(名詞)	} 実字
代字(代名詞)	
静字(形容詞)	
動字(動詞)	
状字(副詞)	
介字(介詞)	} 虚字
連字(接続詞)	
助字・數字(助詞・感嘆詞)	

表 2 陳承沢の品詞分類

名字(名詞)
動字(動詞)
象字(形容詞)
副字(副詞)
介字(介詞)
連字(接続詞)
助字(助詞)
感字(感嘆詞)

すなわち、表1にあるように、「実字」としては、「名字」(名詞——以下、筆者による日本語文法における対応語を記す)、「代字」(代名詞)、「動字」(動詞)、「静字」(形容詞)、「状字」(副詞)を挙げ、「虚詞」としては、「介字」(英語の前置詞に似る。日本語の接頭語とは異なる)、「連字」(接続詞)、「助字」(助詞・助動詞に相当)、「數字」(感嘆詞)を挙げている。馬建忠は、副詞を「実字」に配している⁴⁾。

民国以降、最も早く現れた文法書の一つに、陳承沢『国文法草創』がある。各品詞の名称も『馬氏文通』ともかなり似ているが、品詞の順位が変るとともに、「代字」が「名字」の中に組み入れられ、形容詞・副詞の名称が「象字」・「副字」のように変る。また、「助字」・「數字」が独立して、「助字」と「感字」とになっている。それよりも大きな特徴は、「実字」・「虚字」という用語を用いてはいるものの、

蓋虚字，實字之別，亦文字歷史上遺物之一也。(蓋し虚字・実字の別も亦た，文字の歴史上の遺物の一つならん。)

と述べて、これによって品詞分類を行っていない点に在るであろう⁵⁾。

黎錦熙『新著国文法』は、陳承沢のそれをさらに徹底している。「実字」・「虚字」という用語を用いないばかりか、そうしたものに拠らない新しい術語を創出する。表3にあるように、名詞・代名詞を合わせて「実体詞」とし、動詞(同動詞——「是」・「為」等の語——筆者)を「述説詞」とする。また、形容詞・副詞を合わせて「区別詞」とし、介詞・連詞も「関

表 3 黎錦熙の品詞分類

(1) 名詞	(2) 代名詞.....實體詞
(3) 動詞(同動詞).....	述説詞
(4) 形容詞	(5) 副詞.....區別詞
(6) 介詞	(7) 連詞.....關係詞
(8) 助詞	(9) 歎詞.....情態詞

係詞」とし、助詞・歎詞を「情態詞」としているのである。黎錦熙はこうした分類の定義として

九種詞類、大體是按照一般文法分別詞品的通規而定的。但人・意識中反映的「對象」、實只具有三方面：一、實體；二、作用；三、性態。(九種類の品詞は、一般的な品詞分類法の規則に基づき定められたものである。しかし、人々の意識の中に反映する「對象」は、実は三つの面しかない。すなわち、一、実体；二、作用；三、性態である。と述べるが、「実体」を意味に、「作用」を機能に、「性態」を様態に置き換えられるとするならば、当時としては極めて暫新なものだったと言えるであろう。「実詞」・「虚詞」という分類法は、多分に意味を重視したものであるからである⁹⁾。

楊樹達『高等国文法』も、「実詞」・「虚詞」による分類法を取らない。この『高等国文法』は『馬氏文通』の批判から出発したと言って過言でなく、後の『馬氏文通刊誤』の誕生を指唆させる。副詞の項を例に取るならば、

表態副詞 馬氏所謂言事之如何成者。(表態副詞 馬氏の所謂事の如何にして成れるかを言う者なり。)

という具合に、『馬氏文通』を引いてから、それらを論じているからである⁹⁾。楊樹達の品詞分類については、表4を参照されたい。

以上が1920年代までの大まかな動向であるが、ここに取り上げたものだけでも、すでに40~50年代に起きてくるさまざまな問題が胎胚しているように思われる。大きく言えば、品詞分類全体の問題であるが、副詞を

表 4 楊樹達の品詞分類

名詞	——獨有名詞・公共名詞・物質名詞・集合名詞・抽象名詞
代名詞	——人稱代名詞・指示代名詞・疑問代名詞・複指代名詞
動詞	——內動詞・外動詞・同動詞・助動詞
形容詞	——形態形容詞・數量形容詞・指示形容詞・疑問形容詞
副詞	——表態・表數・表時・表地・否定・詢問・傳疑・應對・命令・敬讓
介詞	——介動作・介所為・介所從・等多數
連詞	——等立・選訳・陪從・承遞・轉換・提挈・推拓・假設・比況
助詞	——語首・語中・語末
歎詞	

「実字(実詞)」に配するか、「虚字(虚詞)」に配するか、それとも、どちらにも配さない方がよいか、という問題も小さくはない。

1930年代の後半は、所謂「文法革新」の時期⁹⁾であって、陳望道・金兆梓・傅東華・方光壽・張世祿を中心としたメンバーの中から、過去の文法研究に対する批判が一気に噴出した。この時期には、イエスペルセンやブルームフィールドなどの文法理論の影響が多く見られた。また、小林英夫の翻訳を通じて、ソシュールの言語理論も紹介されている。成果についてはともかく、外国の動向に最も敏感に反応した時期の一つであった。

1940年代には、中国語学界における三大著作とも目すべき著作が相次いで出版された。すなわち、高名凱『漢語語法論』、呂叔湘『中国文法要略』、王力『中国現代語法』の三著である。

高名凱『漢語語法論』における、「実詞」・「虚詞」の分類は、図5に挙げたように、極めてユニークである。分類された品詞の数が多いこともさることながら、従来、各品詞個々に、「実詞」・「虚詞」のどちらかが充てられていたのに対して、

实词应和虚词分开，因为这两种词有本质上的区别。(実詞は虚詞と分離すべきである。というのは、この二種類の語には本質的な区別があるからである。)

として、造語成分に重点を置きながら、過去の所謂枠組を完全に取り払っ

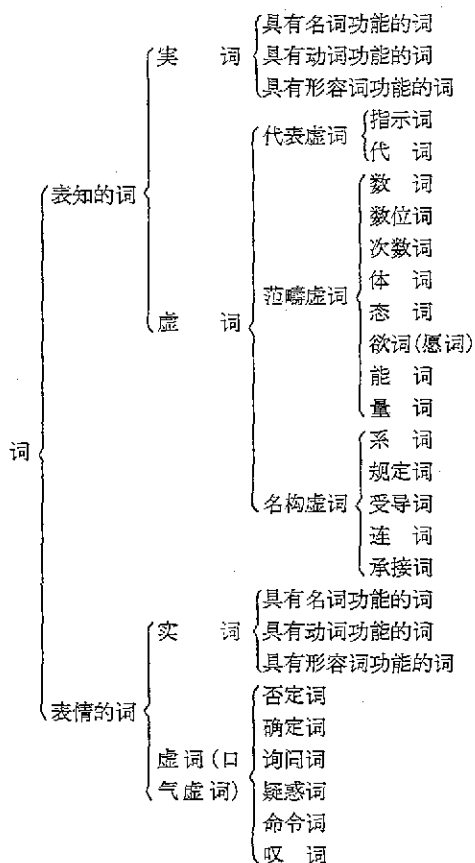


图 5 高名凯的品词分类

てしまったからである⁹⁾。しかし、一方では少々理解しにくい面もないではない。例えば、「昨天来的人」の「人」と、「对敌人的仇恨」の「仇恨」とは、ともに「実詞」に分類されているが、「表知的詞」と「表情的詞」との違いはどこに在るのであろうか。「人」が一般名詞であって、「仇恨」が「恨み」・「憎しみ」等の感情を表わしているからという意味であろうが、確かにはっきり説明されていない。

一方、吕叔湘『中国文法要略』は、「実詞」・「虚詞」という言い方はし

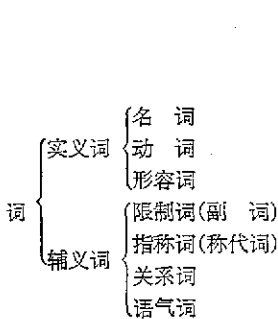


图 6 吕叔湘の品詞区分

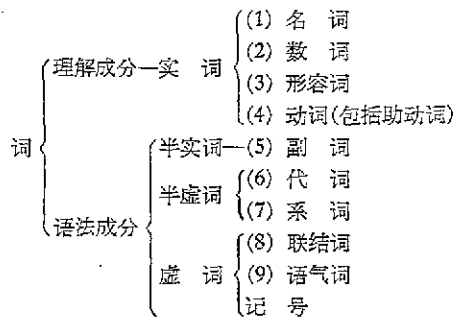


图 7 王力の品詞区分

ていないが、「実義詞」・「補助詞」をそれに替えている点では、所謂伝統的な枠組を越えていないように思われる。図6(『中国文法要略』によって作図する——筆者)を見れば、類似点がよく分かるであろう。ただ、名称の変化は意味・内容の変化にも繋がっているはずである。何故ならば、呂叔湘は、「実」と「虚」について、

同属補助詞，这里面还有虚实之分。(同じく補助詞に属しているものの中にも、虚実の違いがある。)

と考えるからであり、この点では、高名凱の処理に似た側面を持っている。しかし、残念ながら、一、二の例を挙げるのみで、精確には述べられていない¹⁰⁾。なお、呂叔湘は後に、朱德熙とともに、『語法修辭講話』を著す。ここでは、

代詞，副詞，連詞，語氣詞的意義比較空靈，可以稱爲「虚詞」，和從前所謂「虚字」的範圍大致相同。(代名詞，副詞，接續詞，語氣詞の意味は比較的豊富であって、「虚詞」と言うことができるであろう。従来言われてきた「虚字」の範囲とも、ほぼ一致する。)

と言うだけである。「実義詞」を「実詞」、「補助詞」を「虚詞」に戻したのに止まらず、「補助詞の中にも虚実の違いがある」とした観点をも取り下げてしまった感がある。呂叔湘の最終的な結論は、『汉语语法分析問題』で、

看来光在‘虚，实’二字上琢磨，不会有明确的结论；虚，实二类的分别，实用意义也不很大。（考えてみるに、「虚」・「実」二字には、明確な結論は出ないであろう。虚・実の違いは、実用的な意味からは、あまり大きな意味がないからである。）

と言うことになる。

王力『中国现代语法』における立場は、表7にあるように、「半実詞」・「半虚詞」という呼び方を用いた点によく表れている。すなわち、

副词可说是介乎虚实之間的一种词。它们不算纯虚，因为它们还能表示程度，范围，时间等；然而它・也不算纯实，因为它们不能单独地表示一种实物，一种实情，或一种实事。（副詞は虚実の間に在る辭である。程度，範圍，時間等が表せるという意味では、純粹の虚詞とは言えない。しかし、単独で實際の物，氣持，事實を表せないという意味では、純粹の実詞とは言えないであろう。）

と述べる。言わば、高名凱の複雑な分類を単純化するとともに、呂叔湘が明らかにしなかった「補助詞の中の虚実」をより明確にしようとしているかに見える。王力自身も、名詞，代名詞，動詞，限制詞，關係詞，助詞，感歎詞といった七種説を取っていた時があった¹¹⁾わけで、それに比べるならば、詳細になっているわけである。しかし、これはまさに、郭紹虞『汉语语法修辞新探』が、

这种改动都是从马氏的基础上稍加变化而成的。（こうした改良は、馬氏の基礎の上に、少しばかりの変化を加えて、でき上がったものである。）

と指摘したように、「実詞」・「虚詞」に拘泥し過ぎた嫌いなきにしもあらずであろう¹²⁾。陳望道『文法簡論』が

单说虚词是文法成分，那也是片面的。（単に虚詞が文法成分であるとするだけでは、一面的である。）

と批判し、

我们认为，形态部也是有义的，不论实词，虚词都包括意义，形态，功

能三者、这样才比较全面些。(我々は次のように考える。形態部にも意味がある。実詞と言わず、虚詞と言わず、意味・形態・機能の三者を含んでいるわけであるから、こうしたものが含まれていなければ、より全面的なものにはなり得ない。)

と結論づける¹³⁾のも、語彙というものが、意味・形態・機能の三要素を離れては考えられないという意味では正しい。なお、王力は、『中国語法綱要』では、副詞「半実詞」説を取ったが、『詞類』では、「半実詞」・「半虚詞」という名称を用いなかった¹⁴⁾。

1950年代は「論争」の時代であった。1953年9月から「詞類」問題、1955年7月からは、「主語・目的語」問題、1957年には「単文・複文」問題をめぐって、論争が展開された。また、1956年には、中学生・高校生の教学の基準となる「暫拟汉语教学语法系统」、「初・高中汉语语法基本知识参考资料」および、中学の漢語教科書が出版された。ここでは「暫拟汉语教学语法系统」に主として触れたい。

『現代汉语语法讲话』は、「詞類」問題論争が行われる直前に、「中国語文」誌上に陸続と掲載された論文をまとめたものである。この本では、「詞類」の章立てでは行われているが、「実詞」・「虚詞」による分類は行われない。したがって、副詞はそのどちらでもないことになる¹⁵⁾。

『暫拟汉语教学语法系统简述』は前述したとおり、中学生に対する文法教育の標準を示した指導綱領である。表8はその内容である。ここで注意

表 8

一 词和词的构成	二 词 类
三 实 词	四 虚 词
五 助词和叹词	六 词的组合一词组
七 句 子	八 句子成分
九 复杂的谓语	十 主谓结构作句子成分
十一 联合结构作句子成分	十二 特殊的句子成分
十三 句子成分的倒装和省略	十四 单部句
十五 复 句	十六 复句的紧缩

しなければならないのは、「実詞」・「虚詞」という分類法が行われていることである。副詞は、介詞などとともに、「虚詞」に配されている。朱星は「暫拟漢語——」について、

…，在学习吕叔湘、朱德熙编写的《语法修辞讲话》的基础上，由教育部人民教育出版社中学汉语编辑室编写出《暂拟汉语教学语法系统》（1956年1月）和《初、高中汉语语法基本知识教学参考资料》，《以及中学汉语课本。（吕叔湘·朱德熙編の『語法修辞講話』を基として，教育部，人民教育出版社の中学漢語編集室により，「暫拟漢語教學語法系統」（1956年1月，「初、高級中学漢語語法基本知識教學參考資料」ならびに，中学の漢語テキストが編集，出版された。）と語っているのが、『漢語語法修辞講話』を基礎とすれば，表9にあるよ

表9 『漢語語法修辞講話』の分類

第一讲	语法的基本知识
第二讲	词 汇
第三讲	虚 字
	代詞，們 數量，比較的和，跟，同，与，及，並，着，了，把，被， 对 於，關於 在，从，当 因为，为了 由於，結果，使，与否定有关的
	虚字 其他虚字 文言虚字
第四讲	结 构
第五讲	表 达
第六讲	標 点

(第三講以外は細目を省略)

うに、「実詞」・「虚詞」の分類法が取られ，副詞は「虚詞」に分類されることになろう。事実，以下のとおりである。

また，その編集に当たったのは，張志公であったとされる¹⁷⁾。張が志公自身，自著『漢語語法常識』の中で，品詞の分類に「実詞」・「虚詞」の別を用いており，副詞は「虚詞」の中に入れている。後に，張静は，

把副词算作虚词的一种，…。这些意见虽然曾为许多人所接受，但也都值得讨论。（副詞を虚詞の一種と見なしている，…。こうした意

表 10 「暫拟汉语语系統」の分類

词		类	例	词	
实	1 名词	名 词	学 生 书 戏 剧 今 天 北 京		
		方 位 词	上 下 后 里 外 中		
	2 动词	动 词	走 爱 护 研 究 变 化		
		附	能愿动词	能 敢 肯 会 必 须	
			趋向动词	来 去 上 来 下 去	
	判 断 词	是			
	3 形 容 词	大 红 香 优 秀			
	4 数 词	一 二 三			
	5 量 词	个 只 趟 次			
	词	6 代词	人 称 代 词	我 你 他 它 我 们	
疑 问 代 词			谁 什 么		
指 示 代 词			这 那		
虚	7 副 词	很 都 常 常 不			
	8 介 词	从 往 把 被			
	9 连 词	和 或 者 但 是 所 以			
	10 助词	结 构 助 词	的 地 得 所		
		时 态 助 词	着 了 过		
		语 气 助 词	呢 吗 吧		
11 叹 词	啊 唉 噫				

見は多くの人々に受け入れられているが、討論に値するものである。と述べているが、これは「暫拟漢語教學語法系統」が「副詞虚詞」説を取ったことに対する、反対の表明であろう¹⁸⁾。

なお、1981年、「全国語法和語法教學討論会」の討論を経て、『暫拟漢語教學語法系統』の修訂が行われ、新たに「教學語法試行方案」と呼ばれ

る綱領が出された。これによれば、八個所がけずられたり、簡単になったりしている。また、十個所が改められ、六個の事項が増補されている。ただ、「虚詞」・「実詞」および副詞については、「暫拟汉语——」とそれほど変わっていないようである¹⁹⁾。中学の漢語教学における新たな綱領である「中学教学语法系统提要(試用)」では、「実詞」・「虚詞」の分類を行い、副詞を「虚詞」に配している。陳望道が、

…，不论实词，虚词都包括意义，形态，功能三者，这样才比较全面些。（…，実詞・虚詞を問わず，意味・形態・機能を含んでおり，三者がそろって始めてより全面的になる。）

と言って、機能を重視した²⁰⁾としても、「実詞」・「虚詞」のどちらかに、機械的に配置できる方がスクールグラマーとしては便利な面がある。「実詞」・「虚詞」なる分類は、『馬氏文通』以来の分類法であった。それをを用いることにより、截然と品詞分類ができることもあって、利用されてきた面も見逃がせないわけである。日本語においても、形態の上からはっきりと品詞分類ができる橋本進吉の説を基にした文法理論が、今日も学校文法として行われていることと、よく似ていると言えるであろう。

表 10 は、副詞の下位分類と「実詞」・「虚詞」の別を表にしたものである。『馬氏文通』以降の諸書の取り扱いについては、年数順の配慮をしているので、これを御覧いただきたい。

本稿は昭和 63 年度特定課題研究：「漢語詞匯含義研究並びに漢語含義教授法研究」の一環である。

表 11 副詞の分類と虚実の別

著者	書名	出版社	年	分類	虚実の別	備考
馬建忠	馬氏文通		1904	なし	実	
陳承次	国文法草創	商務印書館	1922	なし	虚	
黎錦熙	新著国語文法	商務印書館	1924	時間, 地位, 性態, 數量, 否定, 疑問	なし	
楊樹達	漢語国文法	商務印書館	1929	表態, 表數, 表時, 表地, 否定, 詢問, 伝態, 心對, 命令, 表敬	なし	
高名凱	漢語語法論	商務印書館	1941	なし	なし	図 5 参照
呂叔湘	中国文法要略	商務印書館	1942	方所, 時間, 動態・動相, 程度, 判断, 否定, 一般	虚	
王力	中国現代語法	商務印書館	1943	程度, 範圍, 時間, 方式, 可能性・必要性, 否定, 語氣未品, 關係未品	半実 詞	
王力	中国語法綱要	龍門書店	1946	なし	虚に 近し	
王力	中国語文講話	開明書店	1950	なし	なし	
廖庶謙	口語文法	三联書店	1951	空間, 時間, 數量, 性狀, 客觀, 主觀, 代替, 疑問, 關係, 然否	なし	
呂叔湘 朱德熙	語法修辭講和	開明書店	1952	なし	虚	
曹伯韓	語法初步	工人出版社	1952	なし	なし	
魯果	語法基本知識	益昌書局	1953	なし	なし	
張志公	漢語語法常識	新知識出版社	1953	(動作・行為・發展變化・性質・状態の進行・存在の程度)	虚	
張淑舟	簡明語法	五十年代出版社	1955	なし	実	
王力	虚詞的用法	工人出版社	1955	なし	虚実	

著者	書名	出版所	年	分類	類	虚実の別	備考
俞敏	語法和作文	中国青年出版社	1955	範圍		虚	
張翥	語法比較	湖北人民出版社	1955	なし		虚	
凌冰	語法知識提要	北京人民教育出版社	1955	なし		虚	
郎毓章	漢語語法	遼寧人民出版社	1956	時間・性状・數量・語勢・否定		なし	
胡文鏞	現代漢語語法探索	新知識出版社	1957	なし		なし	
張靜	初級教學講話	湖北人民出版社	1957	なし		虚	
施樹林	漢語語法提要	江苏人民出版社	1957	なし		虚	
陳其農	現代漢語語法	湖南人民出版社	1957	時間・程度・範圍・狀態・象声・否定		なし	
王力	詞類	新知識出版社	1957	範圍・程度・時間・方式等		なし	
郭錫舟	詞類	上海教育出版社	1957	時間・程度・範圍・重複・連續・併列、否定・肯定・可能、語氣		虚	
繆一之	漢語語法基礎知識	湖北人民出版社	1957	程度、分量、狀態、時間、否定		なし	
陸志韋	漢語構詞法	中華書局	1957	なし		虚	
馬漢麟	語法概要	新知識出版社	1957	程度、範圍、時間、否定等		なし	
黎錦熙	比較文法	科學出版	1958	なし		なし	
許威漢	漢語詞源基礎知識	湖北人民出版社	1958	なし		虚	
李樹生	現代漢語虛詞例釈	人民教育出版社のち商務印書館	1960	なし		虚	
北京大學中文系1955級	怎樣用虛詞	上海教育出版社	1962	時間、頻率、範圍、連續、語氣等		虚	
顧巴彥	現代漢語	新華書店	1962	程度、範圍、時間、否定、語氣		虚	
北京大學中文系	白話文法十四講	正中書局	1968	性態、地位、時候、數量、然否、疑問		虚	

著者	書名	出版社	年	分類	類	虚実の別	備考
華中師範學院 中文系	現代漢語語法知識	湖北人民出版社	1972	程度, 範圍, 時間, 頻率, 然否, 語氣	虛		
陳望道	文法簡論	三聯書店香港分店	1978	(限制, 情状のみ)	実		
趙元任	漢語口語語法	商務印書館	1979	なし	なし		
王鍾林	現代漢語語法	內蒙古人民出版社	1979	時間, 頻率, 語氣, 肯定・否定, 狀態, 新式	虚		
北京師範大學 中文系	現代漢語語法知識	北京出版社	1979	程度, 範圍, 時間, 肯定, 語氣	郭		
紹虞漢	語語法修辭新探	商務印書館	1979	なし	なし		
耿士俊	現代漢語虛詞	內蒙古人民出版社	1980	なし	虚		
華宏嚴等	實用漢語語法	山東人民出版社	1982	程度, 範圍, 時間, 然否, 語氣	虚		
江天	現代漢語語法通解	遼寧人民出版社	1982	時間, 重複・連続, 範圍, 程度, 肯定, 否定, 情状	実		
王維賢等	現代漢語語法	浙江人民出版社	1981	時間・頻率, 程度, 範圍, 肯定・否定・可能	実		
黃漢生	現代漢語語法修辭	書目文獻出版社	1981	範圍・時間, 情態, 肯定・否定, 程度, 語氣	可		
吳棣才等	現代漢語	雲南人民出版社	1981	程度, 時間, 頻率, 否定, 語氣, 範圍	虚		
呂根堂 王 霖	中學、文基礎知識		1981	なし	虚		
馬 真	簡明實用漢語語法	北京大學出版社	1981	程度, 範圍, 時間, 否定, 重複・連続, 語氣, 方式	なし		
洪心衡	現代漢語語法概要	廣東人民出版社	1981	時間・地点, 重複・頻率, 範圍・方式, 程度, 情勢, 肯定・否定, その他の語氣	なし		
北京市工家教育 研究室等	語文基礎知識六十講	北京出版社	1981	程度, 範圍, 時間, 否定, 語氣及びその他	なし		

著者	書名	出版所	年	分類	虚実の別	備考
華南師範学院 中文系	現代漢語虚詞	広東人民出版社	1981	なし	虚	
劉群等	实用現代漢語詞法	外語教学与研究出版社	1983	時間, 範圍, 重複・頻率, 程度, 肯定・否定, 情態	実	
鄭富南等	漢語語法新編	湖南人民出版社	1983	程度, 範圍, 時間, 重複・頻同, 情状, 肯定・否定, 語氣	実	
史錫筠等	現代漢語	北京師範大学出版社	1984	程度, 範圍, 時間, 頻率, 情態, 肯定・否定, 語氣	実	
王自強等	中学教學語法系統 概要(試用)	人民教育出版社	1984	なし	虚	
田中英	現代漢語虚詞用法 小詞典	上海辭書出版社	1984	なし	虚	
楊世長等	語法述要	安徽教育出版社	1985	否定, 程度, 時間, 範圍, 情態	実	
何世達	現代漢語語法講義	知識出版社	1985	程度, 範圍, 時間, 然否, 語氣	虚	
倪宝元等	現代漢語	北京大學出版社	1985	能, 語氣, 連統・重複・進行	虚	
房玉清	实用漢語語法	福州人民出版社	1985	時間, 狀態, 重複, 範圍, 程度, 語氣	虚	
武占坤	現代漢語	北京語言學院	1985	程度, 範圍, 時間, 否定, 語氣	虚	
周靖	現代漢語	河北人民出版社	1985	程度, 範圍, 時間, 頻率, 然否, 情態, 語氣	虚	
李鳳儀	現代漢語虚詞造句	東師範大学出版社	1985	時間, 程度, 範圍, 頻率, 語氣等	虚	
葉蒼嶺	現代漢語語法基礎 知識	光明日報出版社	1985	時間, 頻率, 語氣, 肯定・否定, 狀態・方式	虚	
張靜	漢語語法問題	北京教育出版社	1986	時間, 頻率, 語氣, 肯定・否定, 狀態・方式	虚	
		中国社会科学出版社	1987	程度, 時間, 範圍, 估量, 語氣	なし	

注

1. 『爾雅』「釋詁篇」に
速，及，暨与也。
「釋言篇」に
庶幾，尚也。
「釋訓篇」に
暨，不及也。
などとある。
2. 『文心雕龍』「章句篇」に，
夫，惟，蓋，故者，發端之首唱，之，而，于，以者，乃札向之旧体；乎，哉，
矣，也，送末之常科。
とある。
3. 詳しい分類は以下の三十種。
重言 省文 助語 斷辭 疑辭 詠歎辭 急聲 緩辭 發語辭 語已辭
設辭 別異之辭 繼車之辭 或然之辭 原起之辭 終竟之辭 頓挫之辭
承上 轉下 語辭 通用 專辭 僅辭 歎辭 幾辭 極辭 総括之辭 方
言 例文 実辭虚用
その訓釈の例としては
正訓 反訓 通訓 借訓 互訓 転訓
の六種を挙げる。
4. 緒論「正名」字類に
凡字有事理可解者，曰實字。無解而惟以助實字之情態者，曰虚字。實字之
類五，虚字之類四。
とあり，表1もこれによった(呂叔湘球海秦編『馬氏文通讀本』・上海教育出
版社)。
5. 『國文法草創』(『語彙彙編』・第四十一輯所収同書による)には，
凡表物及物之體，相，用，或雖非表體，相，用，而有支配其體，相，用(不
完全他動屬之)，直接限制其體，相，用(指示象字及限制副字屬之)之作
用者，爲實字，此外，則爲虚字。
とある。
6. 『新著國語文法』(1955年校訂本 商務印書館による)第二章「詞類的區分
和定義」では，本文(57ページ)に引用した個所に続けて，
一個觀念の内容，雖有完全具備這三方面的可能，但句法上語詞的任務，各
只能據當一方面，因之大多數有對象的語詞，就在本質上照這三方面分爲三
大類；一，“實體詞”，表實體的，就是名詞，代名詞；二，“述說詞”，表
作用的，即動詞；三，“區名詞”，表性態的，即形容詞，副詞。
と言う。
7. その他については以下のとおり(『汉语语法丛书』所収『高等國文法』・商務
印書館による)。
二 表態副詞 馬氏所謂度事成之有如許者。三 表時副詞 馬氏所謂指事
成之虛者。五 否定副詞 馬氏所謂決事之不然者。六 詢問副詞 馬氏所
謂傳疑難不定之狀者。七 傳疑副詞 馬氏合于前一種，不另列。八 應對
副詞 馬氏無。九 命令副詞 馬氏無。十 敬讓副詞 馬氏無。

8. 『中國文法革新討論集』(『學術』第二輯, 1940 學術社刊)の汪馥泉の後記によれば,

文法革新問題的討論, 從民國二十七年十月二十六日語文週刊第十六期起(語文週刊, 創刊于民國二十七年七月十三日), 到民國二十八年二月六日, 語文週刊第三十期起發刊專輯討論, 到三月二十日語文週刊第三十六期以後, 討論暫中斷。東方雜誌第三十六卷第二十號, 刊載傅東華先生的文法稽古篇。學術(即本誌)第二輯, 陳望道, 張世祿諸先生發表論文筆者寫了一點「語彙試論」。方光蕪先生原定撰漫談文法學, 因事未克執筆, 待寫成, 再刊入學術, 夏丏尊先生撰文法偶識將刊入學術第三輯。

とある。

9. ただ, 先行の諸家でも, 黎錦熙『新著國語文法』や楊棻達『高等國文法』では, そうした虚実の別を採らない(表 10 参照)。
10. 『中国文法要略』(汉语语法丛书, 商务印书馆)によれば,
比如「你」, 「那」, 「什么」, 「三」等词的意义还是比较具体, 作用也和实义词差不多; 其次, 「极」, 「又」等词, 意义也还容易把握; 到了「所」, 「所以」, 「者」, 「乎」, 「呢」等, 那就虚透了。
- と言う。
11. 『中國文法學初探』(1940, 商務印書館)では,
依中國語的駢句看來, 中國的詞只能分爲下列的七類:
として, この七種類が挙げられる。
12. 『汉语语法修辭新探』下冊 (P. 546) による。
13. 『文法簡論』(三联书店 香港)による。なお, 同書の品詞分類では,

部門	大 类	类	小 类
实 词	一, 体词	1 名 词	甲. 人称代词 乙. 关接代词 丙. 询问泛提代词
		2 代 词	
	二, 用词	3 动 词	
		4 形容 词	
5 断 词			
6 衡 词			
三, 数词	7 数 词	附: 单位词	
	8 指 词		
四, 副词	9 副 词	甲, 限词 乙, 饰词	
虚 词		10 介 词	甲, 前直介词 乙, 后置介词
		11 连 词	甲, 并列连词 乙, 搭配连词
		12 助 词	甲, 起发助词 乙, 提式助词 丙, 顿挈助词 丁, 收束助词 戊, 带搭助词
		13 感 词	甲, 呼词 乙, 叹词

となっている。

14. 『詞類』(『漢語知識講話』第一輯)によれば、
副詞雖屬於虛詞一類，但它帶有幾分實詞的性質，……。
などと言って、半實詞、半虛詞に近い表現を採るが、本書の啓蒙的性質からか、
敢えてそれに言及していない。
15. 『現代漢語語法講話』(『中國語文叢書』所収)